

「不条理ショートストーリー」第2巻（上）

「時空の襞 NITE」

不条理世界における戦争と平和

やほねしあ興房

内容一覧

第 11 話：「ときのながれにながされて、かりのすみかもおぼつかず」

第 12 話：「嚙んでみる ガムにほぞに 女性の肩に いい人に」

第 13 話：「天上音楽は安住の地を天上に求めて漂白す」

第 14 話：「殺しも殺されもしない積極的“丸裸”戦争論」

第 15 話：「徳をもってする“戦争アンダーコントロール論”の…」

第 16 話：「火と水と 我が身世にふる ながめせしまに」

第 17 話：coming soon

第 18 話：coming someday

第 19 話：coming someday

第 20 話：coming someday

「ときのながれにながされて、かりのすみかもおぼつかず」

怖れよ！

鳥よ怖れよ 人を怖れよ

猿よ怖れよ 人を怖れよ

人よ 人を怖れよ

山を怖れよ 海を怖れよ

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

少年3人は必死だった。太った少年が櫓にしがみつき、大人の操船を頭に浮かべながら前に後ろに櫓をこねるが、櫓はすぐに支えから外れた。波は立っていなかったが、潮は確実に外洋に向かっていて、そこには黒潮が待ち構えていた。

少年3人は、夏休みのある日、湾に繋がれていた小さな漁船の上で遊んでいた。あまりに夢中だったので、モヤイが解かれたのにも気がつかなかった。気がついたら船は静かに狭い水路を流されていた。

少年3人は、それほどあわてなかった。3人とももっと小さいときから海には慣れている。潜っては貝を採り、台風の前には筏で高波に乗った。海は友だち、海は母であった。だから海に飛び込めば簡単に岩場まで泳げる。いや、その水路なら船から岩場へ飛び降りることさえできた。

船はずっと流されていた。3人は突然、不思議な不気味さに襲われた。彼らは引き潮の力を知っていた。

腹を据えて、太った少年が櫓の穴を船のともに突き出した支えに刺して引いた。ガタッと音がして櫓は外れた。またはめて押した。ガタンと音がして外れた。その繰り返しだった。その度に櫓は外れたが、少年はやめなかった。

あとの二人は息を飲んで太った少年を見守った。なかなかうまく行かなかった。だが、3人はやめなかった。そうだ、いま3人は一人になって櫓をこごうとしていた。3人のただの一人も、海に飛び込んだり、岩に飛び移ろうとはしなかった。おそらく考えもしなかっただろう。それは船を置いてきぼりにしてはいけなかったからである。

船は大事な生活の道具だ。この船の持ち主の顔が浮かぶ。船を流したと知ったら烈火のごとく怒るだろう。いや、息子が死んだときのように嘆き悲しむかもしれない。それは引き潮の恐怖よりもずっと怖いことだった。もしかしたら少年たちは船の持ち主の背後に村の黒雲のようなずしりと重い空気を感じていたのかもしれない。

「そうでしょ、あ～たは私と話しているんですから、あ～たもこの世の人」
「嘘でしょ。第一、私は階段なんか登って来てませんよ」
「あ、そう。じゃあ、途中で閻魔様に足を引っ張られたのかもしれないね」
「でも、あの世に行くと、いや、この世に来ると…ややこしいな。みんな神や仏になると言うじゃありませんか。あなたは私を“人”って呼んでますよね」
「往生際の悪い人だな。いや、往生してんのか。いや、この人はまだ往生してない…」
「何をぶつぶつ言ってるんですか！」
「神や仏って、あの世の人たちが勝手に言ってるんで、実際にいるかどうかわからないんですよ。だからね、人でも神、仏でもなんでもいいんです」
「じゃあ、さっき言った閻魔様は？」
「ああ、あれは力の強い人たちが月番で交代制でやってます」
「え～、そうなんですか。でも怖いんですよ」
「そんなことはありません。マーシャル語でエンマとは“いい”ということです。この世とあの世が別れる前からあった言葉なのです」
「勉強になります」
「閻魔様は、階段を上りたくない苦しんでいる人を助けて往生させてくれるのです」
「閻魔様も大変でしょうね。往生しますね」
「?…」

「おじいちゃん！ おばあちゃん！ ご飯ですよ」
「は～い」「ハ～イ」
「あら、今日は二人ともはっきりしてんのね。ご飯が終わったらお薬を飲みましょうね。間違えないようにね」
手にしているノートの表紙で、キラリと「閻魔帖」という言葉が光り、そして消えた。

☆☆

「豆腐の角に頭をぶつけて死んでおしまい！」
大晦日になっても借金を返せない男は、おかみさんに言われて一生懸命考えました。どうやったら豆腐の角に頭をぶつけて死ねるだろうか、と。最大の問題は、豆腐を買うお金さえないことでした。豆腐屋の前を行ったり来たり。ときどきは井戸を覗き込んだりして考えていました。

豆腐屋は昔、大関にまでなったという元相撲取りでした。店の前を行ったり来たりしている暗い表情の男に気がついていましたが、そのうちいなくなるだろうと豆腐作りの作業を続けていました。

男が店に入ってきました。そしてか細い声で「豆腐の角をください」と言いました。
「え？ 何？」——元大関の豆腐屋が聞きました。「豆腐の角です。トーフのカド」——男

が声を振り絞るように答えました。

「豆腐の角をどうするんです？」

「死ぬんです」

「なに？」

「頭にぶつけて死ぬんです」

「そりゃあ、危ねえや。うちの豆腐は石より硬いって評判なんだ。頭をぶつけりゃ、脳みそにまで食い込んでしまうぜ」

「それは好都合」

「冗談じゃあない」

奥から豆腐屋のおかみさんが声を聞きつけて出てきました。男の顔を見るなりびっくり。

「まあ、金ちゃん！」——すっとんきょうな声を出してしまいました。

「そういうお前は？」

「品川の……」「あ！ お前は！」

そうです。品川の海と一緒に飛び込もうとして、一人だけ逃げ出した女郎です。

「坊主になった女郎というので馬鹿にされていられなくなり、転々としたあと、昔世話になった千早姉さんのあとを追ってここまで来たの」

「いまじゃあ、わしの女房でござんす」

「金を貸してくれ！ いや、金を貸してください」

「わしの女房に何を！」

女につかみかからんばかりにすぎる男の胸を、元大関の豆腐屋が力任せに突き飛ばしたからたまらない。男は、宙を飛んで井戸のそばへ。恨めしそうに豆腐屋夫婦をにらんだかと思うと、井戸へ飛び込んでしまいました。

男はまっ逆さまに落ちた。ずっと、どこまでも。どこかで何かにぶつかって、木っ端微塵に飛び散るはずだった。だが、どこまでもいつまでもまっ逆さまに落ち続けた。

いつの間にか男は霧の中にいました。誰かがいる。そこには骨と皮だけの老人が葛のように曲がった頼りない杖にすがって立っていました。

「あなたは？」「死神じゃ」

「貧乏神に取りつかれたと思ったら今度は死神か。でもやさしい人みたい」

「人じゃあない、神様だ」

「私はどうしてここにいるんでしょう」

「お前はここがどこかわかってんのか」

「いえ。どこです」

「地獄の三丁目だ」

「え？ おれは死んだの？」

「誰かがお前のローソクを接いだみたいだな。かわいそうに元の世界に逆戻りだ」

見ると、死神の後ろに明々と燃えている炎が見えました。燃え上がる炎の先からは、次から次へと四角い紙が舞い上がっています。紙幣だ！

あれほど欲しかったお金が舞い上がっては次々と足下に落ちてきました。

男は心が舞い上がった。「お金だ！ お金だ！」

「持っていくがよい。いくらでも持っていくがよい。地獄の沙汰も金次第。死者にお金を持たせようとあの世で燃やしているようだが、はっきり言って迷惑なのじゃ。この世ではなんの役にも立たん。ゴミが増えてしょうがないから持って帰れ」

男は紙幣を丸めて大きな団子を作りました。その姿はまるでフンコロガシそのものでした。

男は元の世界に帰ってきた。確かにそこは元の世界だった。

だが、家には KAE 帰 RIT ら AI ら kae なか renai った。Kaer itakunai...。そうなのです。かえ r かえら n かえらな k かえらなか t かえらなかつ t 帰らなかつた。

-/:「->”「^<」:-^-.::Σ××!;. ---;-^,; <--:-:-s`”.<`^.`^>`^^` ;_/° .. 7-_|

「噛んでみる ガムにほぞに 女性の肩に いい人に」

満員電車を降りて地下ホームから地上改札口へ昇る階段はびっしりとした人の群れで埋まる。目の前には女性の肩や髪、背中が、近視眼にちょうどくっきり見える距離にある。

そんなとき、女性の背中にあるファスナーを引き下げようという衝動にかられるのは自然な心理であろう。露になった肩を前に噛みつきたくなっても不思議ではない。

それを性的衝動と言うのは簡単だ。だが、男が目の前に突き出された女の肩を軽く噛んだのはそんなことではなかった。それは、小学校低学年の男の子が女先生のスカートの中に隠れる行為に似ていた。男はなにかを伝えたかったのだ。いや、なにかを意識してのことではない。だが、確かに何かを伝えたかったに違いない。無意識にしても、女の肩を噛むという行為が何かを伝えようとしなないわけがないのだ。

「キャーッ！」という悲鳴とともに男は取り押さえられ、警察署に引き立てられた。

男は運が悪かった。“現場”は大都会の主要駅だったし、大きい警察署も近かった。何より、センセーショナルな記事が売り物の夕刊紙の社屋から駅も警察署も丸見えだった。

男が書いていたソーシャルネットワークシステム（大衆社会井戸端会議情報拡散システム）は即座に大勢の人によって白日の下にさらされた。

「学生は学業に専念すべきだ」「人は自らに厳しくすることによって、他者を思い、社会的存在を全うすることができる」「内面を見つめること、自らの細胞に刻まれた宇宙と真理を追求することが私に課された社会的ミッションである」――そこには厳しい倫理観が漂っていた。

一方で社会の不条理に対する怒りをぶつけたりもした。「完成していない原子力平和利用循環システムによる放射能拡散事故によって、平和な家庭の生活や生産のシステムすべてが破壊された」「研究目的以外の放射能施設全廃」ということも書き込んだ。

ネット上は「真面目人間の転落」「抑制されていた欲望が破裂」「仮面を被っていた性格破綻者」などの書き込みで溢れかえった。

夕刊紙は一面トップで報じた。「エリート人間の屈折と欲望」。そこには、「あんな優秀な人間がねえ」「真面目だと思っていたのに、あんな人間だったとは」「まわりにああいう人が普通の顔をして住んでいるなんて怖いです」――いつものような巷の声が紹介されていた。

原子力平和利用を主張するグループは、「反核主義者の実態を暴露する」として、原子力平和利用に反対する者は言うこととやることが矛盾しているというキャンペーンを張った。放射能拡散事故を告発し、原子力エネルギー依存社会からの脱出を主張しているグループからは、「彼は運動に参加していない。我々とはまったく無関係」という声明が出された。

男は素粒子論を研究する理論物理学者を目指していた。研究室の仲間からは「魔がさしたとしか思えない」という声しか聞こえてこなかった。

田舎の父親は気丈夫にインタビューに答えた。「子供の頃からキビを噛むのが好きでした。それがいけなかったんでしょうか。都会で住む人間にそんなこと、やらせなければよかったです……」

噛まれた女は、サトウキビから作った調味料を食べていたのだろうか。サトウキビから作った燃料で車を運転していたのだろうか。それとも、サトウキビから作ったオイルを肩に塗っていたのだろうか。父親はそんなことを考えていた。

男は、変態だったのだろうか。男は、文化が異なる宇宙人だったのだろうか。男は、この社会から排除されるべき異常者だったのだろうか。

男は、数日後、処分保留で釈放された。警察署を一步出たとたん、フラッシュの閃光が一斉に一点をめぐらして炸裂した。それは何度も何度も繰り返された。男は立ちすくんだ。黒山の人だかりの報道陣の間をすり抜けようにも、すり抜ける空間は1ミリもなかった。男はいつまでも閃光の中で白く光った。

男はやがてはドラキュラになった。

☆◇☆☆☆☆◇◇◇◇☆☆☆☆☆☆☆☆◇◇◇◇☆☆☆☆☆☆△△▽▽○○◎◎♪♪♪♪##%%

私はナッツを思いきり噛んだ。私は明らかにイラついていた。500 円のドイツビールを飲む。目の前の壁に無数にかかっている鳩時計がカッコーカッコーと鳴いた。

「なんで鳩がカッコーと鳴くんだ」。私がふと疑問を口にすると、それを耳にした店主が穏やかな口調で諭すように言った。

「ドイツではカッコー時計と言うんですよ」。

なに。すると何か。俺は、カッコーをずっと鳩だと思ってたのか？

おかしいじゃないか。なんで学校の先生もおふくろも教えてくれなかったんだ！

するってえと何か？ 俺様がアホ～アホ～って鳴く鳩時計を発明して売ってもいいんだな。

「そういう問題ではありません」

どういう問題なんだよ！

「いえ、日本ではカッコーはなじみがないので、身近な鳩ってことになったんじゃないでしょうか。文化や自然環境の違いでしょう」

おまえ、なんでカッコーの肩を持つのか？じゃあ聞かすが、日本の鳩車をドイツに持っていけば“カッコーぐるま”って言うのか。

「それはどうでしょう。カッコーは木の上にありますから車になるかどうか……」

逆らうね、この人は。景品表示法（不当景品類及び不当表示防止法）っていうのがあるの、知ってる？

「知ってますよ。一時期大変でした」

そうでしょ。バナメイエビを芝エビって言っちゃいけないんだよ。オーストラリアイセエビを伊勢海老って言っちゃいけないんだよ。

カッコーを鳩って言うっていいの？

「さあ、そこは商慣行というか、お客様との信頼関係というか」

じゃあ、言われる方の身になってごらん。ヘクソカズラって知ってる？

「知りません」

屁と糞だよ。ひどいでしょ。バフソウニもかわいそうだ。人間には差別用語と言っておきながら、イザリウオだのメクラウナギなど動物にはいっぱい使っているよね。どう思う？

「ええ、少しずつ変えてると聞いてますが」

アユモドキもひどいもんだ。アユモドキってアユじゃないのか。アユより先に人間がアユモドキに名前をつければ、アユがアユモドキになり、アユモドキがアユになってたんじゃないのか。

ニセクロホシテントウゴミムシダマシって知ってるか？ ゴミムシでもテントウムシでもないのに、ゴミムシに見せてだましたと言われ、ニセだとまで言われてんだよ。本人は、関係ないでしょ、って怒っているよ。

カッコー時計はカッコー時計！ それができないんなら、カッコー時計モドキとか鳩だまし時計とか名前を変えろってんだ、このハトドケイヤ!!

〈鳩時計からカッコーが飛び出し、アホ～アホ～と鳴いた〉

☆◇☆☆☆◇◇◇☆☆☆☆☆☆△△△▽▽▽○○◎◎♪♪♪#####%%

人混みの中、目の前の若い女性のショルダーバッグのサイドポケットが空いている。ファスナーを閉めてあげましょうか。

ファスナーを閉めたらどうなるでしょう。彼女は中のものを盗もうとしている犯人と思うかもしれません。いや、そうじゃあないんです、と言っても、盗んだ物を仲間に渡したと勘ぐられるかもしれないのです。

実は、サイドポケットには何も入ってなかったということもあり得ます。もしかして、誰かに声をかけてもらいたくてわざとファスナーを開けておいたということはないでしょうか。外からはポケットに何が入っているかはわかりません。少なくともひし形の開口部には何も見えないのです。

階段を登り、そして降り、改札を通り抜け、私は右のエスカレーターへ、彼女は左の階段へ。そこでやっと、私はショルダーバッグの呪縛から解放されました。

☆◇☆☆☆☆◇◇◇◇☆☆☆☆☆☆☆☆△△△▽▽▽▽▽○○◎◎♪♪♪♪#####%%

◎戒名:掌上界天悟空南亭馱樂坊

男は言った。「今日は私の最後の日です」

友はあわてた。「待て！ 何があったんだ。早まるな」。

男は言った。「私は毎日、“最後の1日”を生きています」

男の説明はこうだった。

――60歳になったら死を考えると」言われました。はて、何を考えればいいんだろう。

そこで、いつ死んでもいいように生きようと思ったんですが、自分がいつ死ぬかわかりません。最初は1年後に死ぬとして計画を立てました。1年経っても生きていました。それから1ヶ月後に死ぬ計画を立てました。1ヶ月経っても死にませんでした。

そこで気がついたんです。明日死ぬことにしよう。そして、今日一日に集中しよう
と。

友が聞いた。「1日だけじゃ、何もできないじゃないか」

男は言った。「では、何ができると思いますか」

「今日しかなければ、美味しいものを腹一杯食べるとか、好きな人に出て話をすると
か、思い残すことがないようにするよ」

男が聞いた。「次の日、たまたま生き延びたらどうしますか」

「同じことだ。同じことをするだろう」

男は言った。「私は、100年後、200年後まで続くことを考えます。後世に生きる人た
ちのために何が出来るか、自分にしかできないことは何か、を考えて、今日一日を過ごし
ます。そうすると、自分が考えたこと、やったことが今日で終わろうとも、次の世代の人
につながるでしょう」

男はさらに言った。「明日がなければ、今日の自分が周りの人の印象に残ります。少し
でもいい思い出を残したいと思えば、私は今日は悪いことをしないでしょ。明日生き残
れば、明日も悪いことはしないでしょ。私はいい人としてみんなの記憶に残ることにな
ります」

男の人生設計は120歳までも、200歳までも続いていた。男の目指すものは“永久機関
の発明”だった。もしかしたら、“不老不死の薬の発明”ももくろんでいるかもしれな
い。

男の1日は永遠へと続く1日だったのであろう。

男は急に小唄を唄いだした。

♪ 雨や大風吹くのに 唐笠がさせますかいな（ハイ） 骨が折れまする

「天上音楽は安住の地を天上に求めて漂泊す」

☆☆

島は長雨の季節に入っていた。

少年は、ポツリポツリと滴る竹藪の中に身を屈め、周りをゆっくりと、そしてじっと見回した。枯れた笹がこんもりと盛り上がった何地点かを確認した少年は、右手を伸ばしたかと思うと素早く、そして確実に獲物を手にした。左手に引きずっている段袋は、タケノコの頭が口のところまで顔を見せていた。実際、タケノコの頭だの顔だのと言ってられないくらいの過密さで、段袋の横からも細いとんがり帽子があらゆる方向に突きだしていた。段袋に手にしたタケノコを突っ込んで、顔を戻すと、アップキ（ロンコ）と目が合った。少年は、むんずと鷲掴みにしてポケットに入れた。

少年は右手で目を覆い、左手で段袋を引きずりながら、竹藪からがさごそと這いずり出た。竹藪の中では竹で目を突く恐れがあることを少年は教わることもなく知っていた。

竹藪から出ると少年は駆けた。山から闇が追いかけてきていた。雨のカーテンが山を駆け降りてくる。少年は駆けた。だが、タケノコでいっぱい段袋を背に担ぎながら、柔らかいといえ尖ったタケノコに背を突っつかれながらの早足には限界があった。あっという間に少年は闇に包まれ、滝のような雨に打たれた。

少年は駆けるのをやめ、歩き始めた。角を出したパンパンの段袋を担ぎなおし、胸を張ってゆっくりと歩いた。それは勇者の姿であった。

アップキがポケットから飛び出ても見向きもしなかった。

☆◎◎◎◎◎◎△△△☆☆☆☆☆☆◇◇◇◇◇☆☆☆☆☆☆☆☆▽▽▽◎◎◎◎◎☆☆

父は、親戚の家の縁側にあぐらをかき、道行く人を見守っていた。そこは、投票所となった公民館に続く道だった。

父は、村民が通るたびに手帳に丸かバツを書いた。この日は、村議会議員選挙の投票日当日であった。

集落からは二人が立候補していた。うまく票を分ければ二人とも当選するだけの票が集落にはあった。だが、少しでも偏れば一人しか当選できない。立候補した二人は村長選挙で村長派と反村長派に別れて争っており、票割りが必ずしもうまくいっているわけではなかった。

また、集落外に票が流れれば共倒れになる恐れもなくはなかった。実際、従来の村の慣

習に従わない新興宗教が少しずつではあるが浸透してきつつあった。

その日、父は長年寝たきりの叔母をおぶって投票所に行った。その叔母の票も含め、投票に行く人、帰る人の顔を見みながらの票読みはかろうじて当選するほどの数が見込まれた。

結果はまさかの落選であった。しかも1票差の次点。もう一人の候補者は下位ではあったが当選した。

「あり得ない」。信じられない思いの中で、道行く人の顔を思い浮かべた。裏切ったのは誰だ。あいつか、こいつか、それとも……。叔母の票は、自分が代理署名したのだから確かに自分の票だ。自分の票も自分のものだからこの2票は確かだ。では他の兄弟は？ 母親は？ 妻は？ 一疑い始めたらきりはないが、たった1票差だったのだから、もっとも遠い縁の人間の投票を読み違えただけで十分あり得ることではあった。ただこれまで一度としてあったことはなかったことだけは確かなことだった。

思い返せば、議員だったこの4年間、家業もおろそかにして集落のために働いてきた。集落で管理する山林の払い下げ、納税率の引き上げ、健康診断の実施や学校給食の導入、農道の整備や耕地整理、集団テレビアンテナの建設や電話敷設、上水道の整備など成果を挙げればきりが無い。

それらのどれ一つとってみても、他の議員と比べてひけをとるものではないと思われる。

選挙運動はどうだったのだろう。それもいつもの通り、親類縁者を中心に決め細かな票集めを行った。「もっと押さなきゃだめ。あんたは人がよすぎる」と言われるから、自分が担当したグループから脱落者がいたのかもしれない。もっと集落外からの票集めをしぶとくやるべきだったのかもしれない。

しかし、議員でなければやれなかった仕事などのくらいあるのだろうか。

若くして父親を亡くしてから弟妹を育て、結婚してから5人の子供を育てた。まだ一番下の子供は高校生だ。

地域のことを思い、樟脳工場を起こして人を雇い、製材所も経営して産業振興に尽くした。地域の子供たちの栄養状態をよくしようと、肉屋をやり、食堂をやり、子供たちの笑顔が見たくてアイスキャンデーも回転焼きも売った。地域住民の暮らしを豊かにしようと売り掛けが多い衣料店を続け、シイタケ栽培に挑戦したりもした。

学校のPTA役員もやり、中学校の統合問題では地権者と村との仲介もした。農協の借金に苦しむ人の相談にも乗った。それらのすべてがうまく行ったわけではないが、善意でやっていることだけは誰にでも伝わっているはずだ。でも、選挙に落ちた。

考えてみれば、議員になって増えたのは、根回しと多数派工作だ。そんなことが地域のためになるのかどうか、疑問だ。みんなのためになることは議員でなくてもできることばかりではないか。

落ちてよかったかもしれない。これからは借金を減らすこともできるだろう。

選挙は終わった。まもなくして、父は肺癌に侵され、52歳にして大学生2人と高校生1人を残して死んだ。

☆◎◎◎◎◎◎△△△☆☆☆☆☆☆◇◇◇◇◇☆☆☆☆☆☆▽▽▽◎◎◎◎◎☆☆

父の葬式は、土葬でした。墓場の入り口で読経が、暗い陰を落としているあこの木の枝々を震わし、兄が挨拶をし、人々が「アヨー、なんでいい人が先に逝くのかね」と泣き叫ぶなかで、私は泣きませんでした。

死ぬのは馬鹿だ。泣けば敗けた。泣くやつは馬鹿だ。死んだら終わりだ。泣いたら終わりだ。死んだら敗けた。

訳のわからぬ言葉が私の頭の中を駆けずり回っていました。

「お前は父親の無念を果たしたいのかね」

それはありません。第一、私と父は別な人間です。思想も違うし、立場も違う。

「ほう、どんな思想だ」

父は猫の額ほどの土地にしがみつくとプチブルです。上昇志向が権力にからみとられ、人民を裏切ることになったでしょう。私は無産者のために戦います。

「古くさい言葉をよく知ってるな。勇ましいのはいいが、実際にこれだけの人がお前の父親の死に号泣しているのはなぜじゃ。お前の言う“無産者”のおじいさんが、『生活に困っていたら、庭の、どうでもいいツツジの木を現金で買ってくれた』と喜んでいたが、お前はそれをどう考える？」

私もその家族の無産者の人にかわいがられ、いつも文丹をもらいました。その家族は、

平木で葺いた屋根に石を乗せた家に住んでいました。学校の社会科の教科書には台風が多い島の生活として、そういう家の写真が載っていましたが、人が住む家で石が乗っている家はそこくらいしかありませんでした。どこも瓦葺きの家にしたい、私はそう思います。

「お前の父親もそう言っておった」

それは、見栄からでしょう。本当にそう思うなら社会の仕組みを変えなきゃだめです。

「その無産者の家は、昔は羽振りがよかつたらしい。没落したのは自業自得だと言う人もいる」

どんな人でも最低限の生活をする権利があります。私はどんな経緯であれ、弱い人の立場に立ちます。

「いつの間にそんな強い人間になったのかのう。そもそも、お前と父親はつながっている。死んだら人は土に還り、やがて目に見えぬ小さな粒子となって宇宙に拡散するが、お前の体の中にはプログラミングされた父親と同じ細胞と魂が組み込まれているのだよ」

それは遺伝子の話でしょ。顔形や骨格は似てます。でも、性格や思想は別です。私は私の道を歩きます。「私の前に道はない。私の後に道はできる」です。

「そう言い切れるわけでもなからう。たとえば、ドーパミン受容体 D1 遺伝子は第五染色体の長腕に存在するし、ドーパミン受容体 D2 遺伝子は第十一染色体の長腕、ドーパミン受容体 D3 遺伝子は第三染色体の長腕、ドーパミン受容体 D4 遺伝子は第十一染色体の短腕、ドーパミン受容体 D5 遺伝子は第四染色体の短腕にあるが、その DNA のすべてにおいて、すべての塩基配列が、お前と父親は同じなのだ。それは、どんなときにイライラし、どんなときにものに動じないか、どんなときに落ち込み、どんなときに明るく振る舞うか、お前も父親もそう変わらないということなのだよ。実は、遺伝子が乗っていないと言われている領域の微細な構造も含め、DNA のなかの複雑な塩基配列の交信が魂となって共振しているのをお前は知らないだろう。そこに父親の魂が残っているし、お前の魂の一部ともなっているのだ」

私は人に言われてその通りにするのは嫌いなんです。プチブル的な親の考えが私の考えの中に入り込んでいるわけがない。大体、あなたにつべこべ言われてその通りにすることはないんです。

「では自分でよく考えるんだな」

ほらまた私にそうやって指示するでしょ。それが嫌なんです。考えろと言われて考えること自体が、考えることの本質から離れている。完全に独立した自分自身の考えを打ち立てないと親を乗り越えることもできないと思います。

「お前は一体誰と話をしているつもりなんだ。お前と私のDNAは完全に一致している。すなわち、私はお前自身、お前は私そのものなんだよ」

なら、ほっておいてください。実際、私は今、何の議論をしているかわからなくなっているんです。問題は何でしたっけ？

「お前の前に未知があり、お前の後に無知が残るーそういうことじゃ」

・・・(そして、「非条理ショートストーリー06」にもどる)

☆◎◎◎◎◎◎△△△☆☆☆☆☆☆◇◇◇◇◇◇☆☆☆☆☆☆☆☆▽▽▽◎◎◎◎◎◎☆

ここに“楽器”があります。まだ名前はついていません。何故ならまだこの世に生まれてないからです。

ここでは仮に“吊り木琴”と呼んでおきましょう。

どこまでも広がる草原に、無数の糸が垂れており、その先には3本ずつ短い棒がぶら下がっています。

竹でしょうか、真鍮でしょうか、それとも純金。いや、ガラスのように透き通っているようにも見えます。きらきら輝き、草原の緑をきらめかせた。

棒でしゃくりあげてみます。

♪# ガシャグシャピシャッキー

棒の先に付いた球で叩いてみましょう。

♪# バシャビシャポシャツーン

草原の東西南北に大きく枝を広げたガジュマルの巨樹が遠く見渡せる岩山が中央に鋭い

先端を見せてそびえ、その上に髭の男が立ち上がりました。背伸びをし、手を上げ、指揮棒をまっすぐに降り下ろしました。

♪# バシャグシャピシャッチェーン

大きな音がしました。いえいえ、それは壮大かつ厳かなる一大音楽、総合芸術の終わることのない始まりだったのです。

指揮者は激しく指揮棒を振り回しました。その足元は尖った岩でした。男は飛び上がったとたん、足を踏み外し、後ろ向きに倒れ込んだかと思うと、崖を背中にながらまっ逆さまに落ちていきました。男は重力のままに加速され、やがて体重とは無関係に終端速度に達し、等速落下運動に変わりました。男にはフワッとした感覚とともに空中に浮いた快感を覚えました。

男はゆっくりと手を広げ、タクトを左右させました。

♪#ピチャップチャップッチャーン

吊り木琴が物音を立てました。大きく強くタクトを振ると、大きく強い物音がしました。小さくやさしく振ると小さくて弱い物音がしました。

男はタクトを振り続けました。ゆっくり、弱く、速く、強く、やさしくたおやかに、豪快にたくましく……。すると、次第に物音のリズムが揃い始め、徐々に和音を作っていきました。やがて無数の吊り木琴は壮大なオーケストラになっていました。そよ風と木の葉のおしゃべり、小鳥のさえずり、もぐらのあくび、蛇のダンス、雷の雄叫びー何でも音楽になり、草原を駆け回りました。

音はやがて無限の微細粒子（音子）となり、次から次へと誕生し、地球上を埋め尽くしました。それはやがて反応しあい、まろやかな弱いメロディのときには小さな粒子に、空を轟かせそうな強い音が響くときには大きな粒子になりました。粒子が増えるにつれて音楽は小さくなりました。そして、私の耳にも聞こえなくなりました。

そのときにはすでに、地球には生き物が棲息するに十分な気体に満たされていました。今ではそれは“空気”と呼ばれています。しかし、残念ながら空気は宇宙を満たすまでには至りませんでした。薄皮饅頭の皮のように、頼りなげに地球を覆っているだけでした。

音楽は演奏され続けています。その楽譜には終わりという文字がないのです。しかし、生き物たちはその音楽が聞こえません。

音楽はいつまでも続きます。たとえ聞こえなくても、それを体か心のどこかで受けてい

るはずの生き物たちがいます。生き物たちがいなくなったとき、その音楽は終わったと言えるのかもしれませんが。

いえ、それでも音楽は続きます。生き物たちがいなくなったとき、音楽は物音となって宇宙に飛び出していくのです。

<男は物体となって落ち続けました。>

☆☆

「殺しも殺されもしない積極的“丸裸”戦争論」

私は殺されるのはいやだ
男がナイフを手にして私に迫る
想像しただけでも背筋が凍る
胸をえぐられたときの血しぶきは考えるだけで恐ろしい
ナイフを手で払いのけたとき、手首に刃が当たったらそれだけでも血が飛び散るだろう
そのとき垣間見る相手の顔はどれだけものすごい形相か。

私は殺すのもいやだ
自分が我を忘れて凶行に及び
血糊がついた包丁から血がしたたり
そこではっと我に戻るのか
鬼になったまま暴れまわるのか
そこに倒れているのは誰？

自分は人を殺そうと考えたことはなかったか

親父が肺癌末期で入院したとき
「痛い、痛い」と悲鳴をあげ
「看護婦を呼べ」とわめいた
「痛み止めは何回も打てないから」「もうちょっと待って」
待てるわけもなく一晩中わめき散らす
「看護婦さんと呼んだから」と嘘を言い
それでも時間を見て来てもらい
眠ったときは一瞬の平安
くたくたになって朝、叔母に代わって学校へ
「どうせ助からないんだから早く死んでくれればいいのに」
悪魔の声が胸の奥から響いてくる
本心といえば本心
ブルブルッと頭を振って悪魔を追い払う

親父につながった管を引きちぎらなくてよかった
病院を出たところで大声をあげなくてよかった
駅のホームでナイフを振り回さなくてよかった

あのとき、
手に斧を持っていたら
手に機関銃を持っていたら
カバンに爆弾が入れてあったら
誰かが頭の中で「やれ」と言ったら……………

<殺意はいつでもどこでも見え隠れしている>

「犯人は、何食わぬ顔で被害者宅の近くで暮らしていました」
テレビのニュースは、犯人像を伝えていた。
「おとなしい普通の人でした」
「あんなことをする人とは思いませんでした」
近所の人が画面で首から下だけ見せて語った。
「あんな人が近くに住んでいたなんて怖いです。誰を信じていいかわかりません」

でも、犯罪者はみな普通の人。殺人は私たちの社会の内側で起きている。犯人は私たちの仲間であり、私たち自身でもあるのだ。

☆◇☆◇☆◇☆◇☆◇☆◇☆◇☆◇□△▽☆◇☆◇☆◇◎○▽△□◇☆

「ロケット弾がどこからともなく飛んできて学校を吹き飛ばしてしまいました。犠牲者の数はわかりません」
「病院への攻撃は無人爆撃機の誤爆によるものです。無人爆撃機はテロリストのアジトを狙ったということです」
テレビには犯人の顔は出ない。いつものことだ。ただ悲惨な現場の映像が流されるだけ。だが、どこの国から飛んできたかは誰もがわかっている。
「まさか民主主義を標榜する国がこんなことをするなんて思ってもみませんでした」
「人道に反するとして他国を制裁する国が民間人を殺すとは、正義はどこにあるのでしょうか」

国家は、正義を振りかざす。国家犯罪は国際法に違反しても指導者が罰せられることはない。強ければ、核兵器を世界一多く持っていて、核兵器廃絶を言えばノーベル平和賞をもらえる国であればなおさらだ。

正義は絶えず強者の側にある。
国は必ず勝とうとし、国がなくなるまで殺し合う。
人々は、欲を力に、貧しさを恨みに、恨みを抹殺に変えるしかない。
そのとき、人々はどんな形相をするというのか。

「こんな国に住みたくありません」と叫んでみよう。だが、
——人が住むかぎり地球上に安全地帯はない——

☆◇☆◇☆◇☆◇☆◇☆◇☆◇☆◇☆◇☆◇☆◇☆◇

●かつて私は神に選ばれた。神は言った——「生きとし生けるものすべて集い、地上を楽園にせよ」。

●私は罪深い。私は神の言いつけを実現できなかった。しかし、神は私の代わりに罪を受けられた。神は人類のすべての罪を負った。その神がまさしく今、溜め込んだはずの慈悲を怨念に変え、恨みをむき出しにして逆襲しようとしている。

●ふたたび私は神に選ばれた。神は言う——「人を消せ、地上を浄化せよ」。

☆☆◇◇◇☆☆☆☆◇◇*****◇◇☆☆☆☆☆☆◇◇◇◇◇◇◇◇

「お前は非武装中立を言うが、それは理想主義だ。この世には、悪い人もいる。戦争をしたい権力者もいる。領土を拡張したい国もある。他国が攻めてきたとき、お前はどうかやって愛する家族を守るんだ」

「国と国の問題は、まずは話し合い外交によって解決すべきものです」

「甘いんだよ。領土は武力で制圧して勝ちとるのが普通だ。なめられないようにしないと攻められるんだ」

「武力に武力で対抗しようとする果てしない軍拡競争に陥り、どこまでも緊張は続きます。一触即発の危険性があるなかでは経済は発展しません。信頼と互恵関係がないなかで安定した貿易や交流ができるわけがなく、平和な生活も、多様な価値観を認め合う社会も消えるでしょう」

「力を見せつけながら外交力を発揮するんだ。グローバル社会の中で相手国だって、貿易ができなければ経済がおかしくなり、国民の不満を押さえきれなくなることはわかっている。だが、一時の暴走だってありうる。それに備えなければならん」

「我が国の権力者だって暴走しかねません。そのとき暴力装置である軍隊を持ち、高い攻撃能力を持っていたら取り返しのつかないことになるでしょう」

「相手は強力で、無謀なんだ。我々が弱ければ我々が傷つくんだ。お前は愛する家族が目の前で殺されてもいいのか」

「逃げればいいんです。逃げれば両方とも助かります。戦えば、どっちか、場合によっては両方とも傷つきます」

「逃げるだけではだめだ。いずれ皆殺しに遭うだけだ。お前は愛する家族のために戦わないのか」

「相手にも家族があります。私には人を殺せません」

「鬼のような敵を前に愛する人が殺されてもいいのか」

「それはいやです」

「じゃあ戦え。武器を持て。引き金を引け」

「いやです」

「じゃあ、愛する人も家族も殺されてもいいんだな」

「……………いいです！ でも、私が楯になって先に死にます。死ぬまで非暴力で説得を続けます」

「そして、国家が消滅するのだぞ」

「国家なんてどうなってもかまいません。憎悪の連鎖はやがて人類を滅びさせるのですから」

「始皇帝やローマの時代から戦争はあるが、人類は滅びてなんかいないぞ」

「いいえ、やがて滅びます。だから殺し合いを絶対悪とし、非暴力によって問題を解決しなければならぬのです」

「話し合いがうまく行かないから言っているんだ」

「話し合いは厳しいものです。簡単に諦めてはいけません。愛する人を殺させてはいけなく、愛する人に殺させてもいけないと思う心で話し合うべきです。どこまでも暴力を使わないという覚悟が大事です。私はそのために犠牲になってもかまいません。ただし、相手が私を殺すことも認めてはなりません。私が相手を殺すことと同じことですから。殺しても殺されてもいけないのです」

◇☆◇☆◇☆◇○▽△□◇☆◇☆◇☆◇☆◇☆◇***

国家は暴力装置なり。軍はその一部にすぎず、国民が力で国を守ると考えたとき、国民も民主主義も暴力装置の一部となる。

国家が真の意味で国民の生命と財産を守るとすれば、国家は暴力装置を放棄しなければならない。その場合、多くの地域がほとんどすべての分野において自決権を持ち、国家を超えて世界の各地域と交流し、揺るぎなき信頼関係が築かれなければならない。国家の役割は、福祉や医療、教育に関する政策の調整や国レベルのインフラ整備などに限られるであろう。

防衛の基本は、「ハリネズミ防衛主義」ならぬ「丸裸無防備主義」である。

世界の指導者は誰もが世界平和を主張する。そして言う――「力なくしては平和は守れない。国民を守るために私は戦う」。さらに言うだろう――「丸裸無防備主義は現実にはあり得ない。それは敗北主義であり、破滅につながるひ弱な理想主義である」と。

だが、本当にそうなのか。

実は子供でもわかる簡単なことなのではあるが、誰も本気でやろうとしなかつただけなのだ。なぜなら、丸裸無防備主義の考えはすでに様々な形で用意されていることばかりだからだ。平和への願い。それは太古の昔から変わってはいない。ジュネーブ条約と国際連合憲章前文、日本国憲法第9条を読むだけでも簡単にわかることだろう。

一つの例を挙げよう。ジュネーブ条約「無防備地域宣言」である。

◎地域住民が戦争に巻き込まれることを避ける方法:ジュネーブ条約「無防備地域宣言」◎

ジュネーブ条約には、中立地帯や非武装地帯など非戦闘員を保護する地区の指定が定められており、第一追加議定書第59条では、無防備地域（非防衛地区）が宣言された地区に攻撃を加えてはいけないことが定められている。

無防備地域を宣言するために満たさなければならない条件は以下の4つである。

- 1)すべての戦闘員並びに移動用兵器及び移動用軍用器材を撤去しておかなければならない
- 2)固定の軍用施設又は設備をいかなる敵対的使用にも供してはならない
- 3)当局によるも又は住民によるも、いかなる敵対行為をも行なってはならない
- 4)作戦動作を支援する一切の活動を行ってはならない

これまでも自治体規模で無防備地域宣言の声をあげようという運動はあったが、必ずしも成功していない。防衛・軍事は国の専権事項であり、実効性がないという理由からのようだが、住民の安全を維持し、生活を守るのは自治体としても最重要課題である。交通安全や核廃絶と同じように、無防備地域宣言をやってみればよいのである。そして、地域から起こった声を世界のさまざまな地域に伝える。それこそが草の根の平和外交ではないか。

基地がある地域は「宣言を出したいから基地はいらない」と叫ぼう。軍隊は「災害機動隊」に変わってもらおう。

無防備地域宣言は、私たちが「殺し殺される」ことを拒否し、丸裸無防備主義を現実化する一つの道を示している。

積極的平和主義者は戦争に向けて高らかに進軍ラッパを吹く。その先に進めばもう引き

返すことはできない。命も社会も自然も破壊されるからだ。

丸裸無防備主義者は、いくらでも引き返すこともやり直すこともできる。殺しも殺されもしないからだ。だから勇気と覚悟をもって進めばいいのだ。

●神は言うだろう。

「人は丸裸になったとき、その本性を現す。善か悪か、それによって生き残るか滅びるかが決まる」



「徳をもってする“戦争アンダーコントロール論”の…」

緑深い山道の横の岩の間からちよろちよろと滲み出る水を思い浮かべながら、自宅の洗面所の水をちよろちよろと出し、手ですくいながら顔を洗ってみませんか。

「環境保護のため」「資源の無駄使いをしない」「節水コマを使おう」などという世俗的な思いから解き放たれ、心地よい一日が始まります。

木立の奥深く、小鳥の声が聞こえませんか。脳の伝達化学物質がフィトンチットに変わっているかもしれません。

そうです。人間はちょっとした心の持ちようで幸せにも不幸にも感じるのです。どういう事態に陥ろうとも、足下の小さな幸せを大事にしましょう。どんな大変なことがあっても毎日の出来事に感謝しましょう。人の間違いを責めるのではなく、自分の至らなさを思い、人間性を高める喜びを持ちましょう。不満を成長の糧にすることで喜びがわき、社会に順応し、世のため人のために尽くすことができます。

そういう人は、国を動かすことがどんなに大変なことかも想像することができます。国を動かしている人たちへの感謝の念も自ずと生まれ、徳の高い強い国ができあがるのです。

☆☆☆☆☆☆☆☆◇◇◇◇◇◇☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆◇◇◇◇◇◇☆☆☆☆

――国は非常大権を憲法で明文化しようとしています、国民をしばりつけようとしているのではないですか。

「私たちが国民をしばるわけがないじゃないですか。もし、そう思ったら選挙で落とせばいいんですから」

――我々報道機関に対して陰に陽に圧力をかけているのではないですか。報道規制の強化につながります。

「わたしたちがあなたたちの報道を規制するわけがないじゃないですか。もし、そう思ったら紙面や番組で批判したらいいんです」

――非常権は、国民の人権を無視し、自由な報道をさせないことにつながるのではないですか。

「あなたたちにそんなに力がないというのであれば、それは私たちの問題ではなく、あなたたちの問題でしょう。あなたたちは第四の権力を持っているのですから。」

第一、新聞やテレビでは、現にいろいろな主張がされています。私たちが応援してくれるメディアもありますから私たちは何も困っていませんよ」

――ジャーナリズムは真実を報道し、権力をチェックするのが役目です。国家権力とは緊張関係になければなりません。

「そんなことを言っても、私はあなたたちの会社の社長としょっちゅう会食していますよ。政策を作ってもらったり、選挙情勢の情報交換をしたりもしています。だから最近の選挙報道はよく当たると思いませんか。あなたたちの先輩のなかには政策秘書や政治家になっている人もたくさんいます。私もその一人です」

――政府は非常権を憲法で規定し、関連の100の法案を成立させようとしています、国民の権利を制限する政策に対して国民の中から批判の声が上がっています。

「馬鹿も休み休み言いなさい。あなた方が言っている国民って誰のことですか。」

私たちは選挙に勝ったのですよ。公約に非常権のことは入れませんでした、野党はずっと口にしていました。しかも、党の方針の中には昔から入っているのです。選挙後の

政権支持率は低くないのにそんなことを言ってたら、あなたたちの方が国民に見放されますよ」

――個別案件ごとに世論調査を行えば、いつも過半数の国民が非常大権に反対です。

「聞き方があるでしょ。非常大権に不安があるか、と聞けばあるという人が多くなりますよ。でも、他国が侵略したときにわがままな国民やテロ集団が勝手な行動を取ることに不安を感じるという人は多いし、大災害の時に復旧車両やヘリ、救助隊を優先させたり、支援物資を強権的に集めたり、じゃまな家屋を壊したりすることを許容する人も多いんだから、それは結局、非常大権を支持しているということになるんですよ」

――ジャーナリストは常に権力の横暴に目を光らせ、警鐘を鳴らし続けなければなりません。

「権力敵視に凝り固まった、偏った報道をやっている番組や新聞社も一部あるようですが、法律が成立したらそんな勝手は許されません。大体、そういう人たちの取材は、黙って人の家に入ったり、ゴミ箱をあさったりで、元々法律違反ばかりです」

――それは時代錯誤というものです。いまどきそんな取材はしません。今は、ネット情報を調べたり、行政に情報公開を求めたりする近代的な調査報道が主流です。

「だから、そういう行き過ぎを禁止する法律ができるんです。そもそも行政が情報を非公開にするのは国民や国益を守るため。その趣旨もわからずに情報を入手し、メディアで国民を扇動するようなことは社会的に許されません」

――ジャーナリストは悪法には負けません。たとえ法律違反と言われても真実を求めて国民に伝える活動はやめません。

「あなたはそのうち国家混乱罪で逮捕されるでしょう」

――報道の自由は、社会の健全性を保つ上で重要です。法律に違反した取材方法であっても、報道された内容がその違反以上の利益を社会にもたらした場合、法律違反は許されると思います。ただし、社会から公益に至らない行動だと判断されたら潔く責任を取ります。

「偉い！ 私と同じです。私も、非常時に国民と国益を守らないといけないとなったら、憲法を無視しても指揮命令の義務を果たさなければなりません。憲法を破っても国を守ればいいんです。あとでそれが誤りだと言われたら潔く責任を取ります」

――国民の知る権利を守るためにやることと国民の権利を制限することは違うことだと思うんですが…。

「国民を守るということでは同じですよ。でも、私の方はもうすぐ合法に、あなたの方ははっきりとした違法になります」

――そこまでして何を実現したいのですか。

「私が目指しているのは“聖人政治”です。そして、国の形として“有徳国家”を作り上げたいと思っています」

Σ(×_×;)!?(・_・;☆◇□△※◎○▽△□◇☆☆◇□△▽○! Σ(×_×;)!?(・_・;?

「玉砕という言葉を知っておろう」

102 歳になるという老人がおもむろに口を開いた。

1943 年 5 月、アリューシャン列島アッツ島を守っていた日本軍は上陸したアメリカ軍と戦い、全滅した。

「玉砕とは美しく砕け散ることじゃが、日本軍は見殺しにされ、高地陣地の霧のなかで悶え狂い、砲撃に砕け散るのみだった。最後は万歳突撃と集団自決じゃ。とてもウツクシイトハ言えまいて」

大日本帝国は、アッツ島守備隊に対して玉砕命令を発した――「軍は海軍と協同し万策を尽くして人員の救出に務むるも地区隊長以下凡百の手段を講じて敵兵員の燼滅を図り最後に至らば潔く玉砕し皇国軍人精神の精華を発揮するの覚悟あらんことを望む」

助けにいかないから死ね、という命令だった。アッツ島守備隊司令官は最後の電報を東京の大本営に打った――「野戦病院に収容中の傷病者は其の場に於て軽傷者は自身自ら処理せしめ重傷者は軍医をして処理せしむ 非戦闘員たる軍属は各自兵器を採り陸海軍共一隊を編成 攻撃隊の後方を前進せしむ 共に生きて捕虜の辱しめを受けざる様覚悟せしめたり」

2016年2月、日米合同の軍事演習があった。テーマは「離島奪還」であり、オスプレイが飛び、水陸両用艇で上陸する作戦が行われた。殺される心配のない訓練ではあるが、これが本番ならまさしく70年前の再現になるだろう。

「皮肉なことだ。太平洋の島々で殲滅戦を戦った者同士が70年後に一緒になって、取られた島を取り戻す戦争をしようとしている」

老人は昨日のことに玉砕（総員壮烈なる戦死）した島々のことを話し始めた。

- ・1943年 5月アッツ島、11月ギルバート諸島のマキン環礁、タラワ環礁ベティオ島、アベママ島
- ・1944年 2月マーシャル諸島のクワジェリン環礁、ブラウン環礁、7月ニューギニア西部のビアク島、マリアナ諸島のサイパン島、8月テニアン島、グアム島、9月パラオ諸島のアンガウル島、11月ペリリュー島
- ・1945年 3月ビスマルク諸島のニューブリテン島、硫黄島

そして、1945年6月23日、沖縄の守備隊は「総員壮烈なる斬り込み」を敢行し、玉砕した。

大本営はすでに 1944 年 6 月の時点で「もはや希望ある戦争政策は遂行し得ない。残るは一億玉砕による敵の戦意放棄を待つのみ」としていた。ポツダム宣言を受け入れる 1 年以上前のことだった。その間にも多くの兵士や民間人が死んだ。

老人はつぶやいた。

「当時、日本人は 7 千万人。1 億人は朝鮮人や台湾人、その他占領地の住民も入れてのことじゃ。全員死ねば敵は戦意を放棄するのは当たり前じゃが、みんな殺しておいて何が残るといふのか」

(~_~;) (/\) ☆◇☆◇☆※◎○▽△□◇☆ (~_~;) (/\) \ (o) / ☆◇☆◇☆

青年は完全武装していた。武装といっても武器を持っているわけではない。それはウェアラブル IT の進化形と言ってしまうえば簡単だが、外見は何のヘンテツもない姿のままでの完全武装なのである。

眼につけているコンタクトレンズは、単に視力調整をするだけではない。眼には存在しないはずの物も写し出されていた。

突然雲の中から戦闘機が突っ込んできた。その瞬間、青年は左目でまばたくと、レンズの中で戦闘機が撃ち落とされた。と、屈強な若者が近づいてきて話しかけようとした。青年は再びまばたき、若者を銃撃して消した。猫がすり寄ってきた。青年は右目をゆっくりと閉じた。猫は「にゃーん」と鳴いて消えた。

右手から左方向に何かが通った。確かに微かだが耳に心地よい振動音が残りに、空気の揺れもまだ感じられるほどだ。その物体は青年の体に突き刺さったはずなのに、何事も起こらなかった。たぶん、超高速のリニア浮遊車が通ったのであろう。その瞬間、青年の体はジャンプした。全身に塗った AI 筋肉剤が物体を感知して自動的に作用したのだらう。青年の脳は何も感じていなかった。

10年前、すべての人間はAI筋肉剤を塗ることになった。AI筋肉剤は自律的に作用し、地球上の空間に起きた事象のすべてが世界連邦情報センターに把握され、完全なコントロール下に管理されるようになった。

いまや世の中に武器というものはない。だから殺し合いも戦争もない。頭に浮かんだ殺意はすぐにバーチャルに処理され、脳から悪意が除去された。「殺したい人間がバーチャル空間に出現し、まばたきで消す」というのも処理の一つである。

AI（人工知能）が進むにつれ、脳は退化し、五感がとらえる感覚に反応しなくなっていた。今ではわずかに感情という機能だけが残存している。感情の発露は社会にいい影響を与えるのか悪く作用するのかわからないのでAIによって管理し、社会の秩序が維持できるようにコントロールされていた。

(@_@;)□◇▽◎○@○▽△☆◇◇☆✕φΣ△↑|+↑↑(-.-)Zzz・・・

なぜこの世界が武装解除され、兵器がなくなったのでしょうか。それは必ずしも平和が尊ばれたからではありません。

昔この列島は二度ほど焦土と化しました。東坊ヒデキという人とアベ真理王という人がリーダーだったときだと聞いています。

戦争というのは、戦争の記憶が薄れるにつれ、起きる可能性が高まるそうです。東坊時代とアベ時代の間には70数年という時間の隔たりがあり、戦争の悲惨さを体験した人がほとんどいなくなったとき再び戦争が始まったといわれています。

アベ真理王は「真理はスクラップ アンド ビルドにある。破壊の度合いをコントロールできる適度な戦争は経済発展をもたらす」というアベノリクツ理論を主張し、「戦争も経済もアンダーコントロールされる」と世界に宣言しました。

そして、「戦争を体験しないと戦争の悲惨さはわからない」という国民の声を受け、「コントロールされた戦争は平和を育む」という平和宣言を発しました。ときどき起こる紛争は国民を一致団結させる効果がありました。

アベトモ軍団のリーダーは子どもに言いました。「いいかい、完全な平和は社会を墮落させる。溢れんばかりの愛情は兵士をおじけさせるんだ」

いくつかの小競り合いのあと、突然ミサイルが飛び交い、あっという間に核爆弾と核発電所が連鎖反応を起こし、世界中に核爆発と放射能汚染が広がりました。人々はいかにアンダーコントロール理論が危ういものであったかを知らされました。人の記憶や想像力が頼りにならないことを知った瞬間でもありました。

「戦争の悲惨さはAIに記憶させよう」——大科学者が提唱したとき、誰も反対する人はいませんでした。そして、戦争をアンダーコントロール状態に保つにはどうしたらいいか、考えました。

そうだ！ 戦争をバーチャルな世界に閉じ込めよう！ そうしたらいくら人を殺しても人は死なない。しかも、バーチャルな戦いはどこまでもエスカレートするから次々にソフトが開発され、経済は発展し続けるだろう。

かくして地球上の人類はみな、ゲーム戦士になったのです。

そして、たったひとつの決まりがAI憲章として決められました。

「兵器を 持たず、作らず、使用せず」

☆◇□△△▽○○◎)&¥▽!^(~_(.)_~)△;)(. /.)◎○△☆◇□☆☆☆☆☆☆☆☆

何百年もの間、冷凍庫の中で眠っていたアインシュタインの脳が動き始めた。

反応することをA Iに任せ、退化を続けてきた脳たちが、残った力を振り絞って働きかけた成果だった。

戦闘機を消した青年のまばたきはA Iコンタクトレンズの機能と考えられた。だが、本当にそうだったのだろうか。脳の一部に意思というものが残っている可能性がまったくないとは言えなかった。少なくともアインシュタイン脳は、脳たちが一部先祖帰りしているのを感じ取っていた。一つ一つの脳波は弱かったが、一気にアインシュタイン脳に向かってきたエネルギーは、生半可なレベルではなかったからである。それらは「私たちが意思を取り戻すことに力を貸してください」と訴えていた。

アインシュタイン脳は何もするまいと決めていた。

わずかな記憶のなかに、かつて世界認識を変えた理論が超破壊兵器誕生につながったこと、敵対国の超破壊兵器開発を抑止するために作った自分達の兵器が唯一、実戦で大量殺人を冒してしまったこと、が浮かび上がっていたからである。

アインシュタイン脳はつぶやいた。

「平安は、電気信号と化学反応、そして沈黙によって獲得される」

☆☆☆**☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆*****☆☆☆☆☆☆☆☆*****☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆**☆☆☆☆

一人の脳が歌い始めました。

♪青くなってしり込みなさい 逃げなさい 隠れなさい♪

やがてそれは声なき声となって脳同士が共鳴し合い、脳の世界を流れました。アンダーコントロール状態の唇のAI筋肉剤がわずかに震え、心なしか唇に色が差してきたように見えました。

「火と水と 我が身世にふる ながめせしまに」

死臭がする。

満員電車の扉が閉まり、わずかな風が鼻を通りすぎるとき
ふわっと鼻腔に広がる臭いは
私の体の内部のものだ

死臭だ、確かに。

婆さんが死んだときは乾いた臭いだった
親父のときはやや重い湿った臭いだった
私の臭いは、鼻腔の一部によどんでおり、わずかな風で感覚細胞にひっかかり瞬間、消える

死臭は、私の体細胞のあえぎだ。

私に何かを伝える
私はわかっている
私は何もしない

☆◇☆◇☆◇☆◇◇☆◇☆◇☆◇☆◇☆◇☆◇☆☆☆◇☆◇☆◇☆☆◇☆◇☆☆◇☆☆◇☆☆◇☆☆◇

1995年1月17日午前5時46分52秒

兵庫県南部地震発生。

最大震度7、マグニチュード7.3

ビルが倒れ、市場や住宅が燃え、

神戸淡路大震災となった。

2011年3月11日午後2時46分18.1秒

東北地方太平洋沖地震発生。

最大震度7、マグニチュード8.4

家が流され、人も家畜も流され、

東日本大震災となった。

☆◇☆◇☆◇☆◇◇☆◇☆◇☆◇☆◇☆◇☆☆☆◇☆◇☆☆◇☆☆◇☆☆◇☆☆◇

時が流れ、場が変わり
達陀の踊りはなぜかこの地で躍動する

坊主の群れはたたらを踏み、地をとどろかせて跳ね回る
身を打ち叩き、走り、業火を振り回し、水を与える

それは二世尾上松緑の胸に渦巻き、心に響いた情動が成した芸術
それは奈良東大寺二月堂にあったもの
その元は実忠和尚が見た天界の修行
天の1日地上の400年を一心不乱に一気に我が身に叩きつける14日間
火と水の宇宙の断絶と連続

礼堂に座すと
闇の空気が流れることしかわからぬ内陣を
修行僧がバタバタと下駄を鳴らし400年を駆け回る
ときに一人の僧が飛び出してきて前を抜け、体を宙に飛ばして五体を地に投げつける
ガターン、バターン
鬼も逃げ出す大音響に
僧の内部の怨霊も煩惱も飛び散るであろうが
空間を共にする凡人の魂も浄化されざるをえない

戸帳が開くと二人抱えの大松明が
明々と火の粉を振りまき、
叩きつけるとさらに大きな火の玉が
碎け散る
どんどんどんと床を突き
打ち振り引き回される大松明は
煩惱のすべてを焼きつくす火を飛ばす

気がつくと
女人禁制の礼堂と回り廊下を隔てる格子から
無数の女の手のひらが差し出されている
僧はそこに遠敷明神の水を差す
水は若狭の国につながる清水
十一面観世音菩薩

火で邪を払い、水で身を清める儀式を千数百年も続けてきたこの島で
神戸の街を火が焼き、
三陸の村や原発の岸を水が襲った

何かの力が
何らかの力が作用している
何かある
何かが変わった

この世の 400 年が天界の 1 日であることを忘れたか

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

達陀から韃靼、そして匈奴へ
思いは連なり、かの中央アジアへ

草の香りが大気に流れ、裸馬が踊るように駆ける
ユーラシア 壮大なる大陸
広大なる草原 パオと馬乳と子どもと女
かつて雄々しい匈奴の国

闘いと遊牧が続き
侵略の風は
長城にぶつけられた
ぶつけては跳ね返され
跳ね返されては乗り越えた

憎悪と融合、分裂と抗争
血と涙が乾いた風に乗り、やがて減衰して歴史の彼方に消えた
草の大地 かの匈奴の国

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

2011 年 4 月 11 日午後 5 時 16 分

震度 6 弱マグニチュード 7

東北地方太平洋沖地震余震発生。

私は道路だけが片付けられた瓦礫の中にいた

高台から見れば空襲のあとの風景

友が学んだ中学校を見、保育園の前を過ぎ、津波に耐えた親戚の家を眺め、かつて住んだ
ことのある場所に立つ

そこに家はない

私は津波の破壊力を思い

友は人々の無念さを思う

あの日 人が流され、帰ってこなかった

その数 120

大地が再び大きく揺れた

震度 6 の揺れに 私と友は逃げた

目の前で眠っていたかのような軽トラックは

急発進して後ろ向きのまま走り去った

一瞬のうちにわずかばかりの人影が消えた

片付けられた道を走る

だが、海はいつまでも近い

道は海岸線に平行に走っているからだ

道と道の間は瓦礫が遮り、そこに見える山ははるかに遠い

30 センチの津波が 10 メートルの津波の記憶を呼び覚ますとき

死の恐怖も極限に達するのか

この日 土砂崩れで 4 人が死んだ

☆☆

◆太平天国の乱 20000000-◆島原の乱 45000-◆ウンデット・ニーの虐殺（ス一族）300◆ポ
ル・ポトの大虐殺 1200000-1700000◆スターリンの大粛清 500000-1700000◆ロッド空港乱
射事件 29◆地下鉄サリン事件 13◆パリ同時多発テロ 138-◆相模原障害者施設殺傷事件 19

◆韓国フェリー転覆事故 312◆第一次世界大戦 16563868◆第二次世界大戦 60000000-85000000◆朝鮮戦争 5560000◆ベトナム戦争 8137000◆第2次アフガニスタン紛争 48000-◆イランイラク戦争 1000000◆イラク戦争 4804◆四川大地震 87419◆伊勢湾台風 5098◆神戸淡路大震災 6437◆東日本大震災 18456◆F35A 戦闘機 94600000000 整備用器材 42300000000 滞空型無人偵察機グローバルホーク 173000000000 整備用器材 22000000000 尖閣防衛新型潜水艦 76000000000 奄美大島移動式警戒管制レーダー展開基盤整備 2000000000 新空中給油・輸送機 KC-46A 取得 318000000000 ティルト・ローター機 V-22 オスプレイ取得 393000000000 補用品等関連経費 392000000000 在日米軍従業員給与費 1213000000000 在日米軍施設光熱水道料等 247000000000 総額 5168500000000 円◆

☆☆

地上で1日を過ごす我々は、天界の1日を歩くに14万6千倍で走り続けなければならない。

それは人間の能力にとって無限大に近く、天界にとっておおよそ無に等しい。

が、無ではない。

[第2巻（上）終わり]